



Title	吉田山の業平塚
Author(s)	山本, 登朗
Citation	短歌誌『礫』, 200: 27-30
Issue Date	2003-06-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/1616
Rights	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

吉田山の業平塚

山本登朗

一
竹村俊則氏の『昭和京都名所図会』(全七冊、昭和五五
平成元年・駸々堂)は、江戸時代に数多く出版された絵
入り名所案内である「名所図会」の伝統を踏襲しながら、
現在の京都の姿を、史跡や文化財を中心に、驚くべき精密
さで描き出した名著である。竹村氏はこれに先立って旧版
の『新撰京都名所図会』を刊行しておられたが、それを全
面的に改訂するにあたって、すべての現地にもう一度実際
に向き、実地調査に基づいて記述を修正され、写真を挿
入し参考文献を明記されるとともに、自筆の鳥瞰図まで、
地域の現状に即して新しく描きなおしておられる。その記
述の正確さや詳しさは一般の京都案内などとは比較になら
ず、まさに人生をかけた偉業と言わねばならない。出版社
の倒産によって、このまたとない好著が絶版となったこと
は、まことに残念なことであった。

その『昭和京都名所図会』第二冊に、京都市左京区の吉
田山(神楽岡)山頂付近、竹中稲荷神社の北西部に存在す
る在原業平の塚のことが記されている。脚注には参考資料
として、『史迹と美術』第五十一号(昭和二〇年二月)に
掲載された森口奇良吉氏の「後一条天皇陵と業平塚」とい

う記事が紹介されている。その森口氏の記述によれば、吉
田山の東麓にある現在の後一条天皇菩提樹院陵は、かつて
は「在原業平廟」とされていたが、御陵墓取調事務を委託
されて調査をおこなった考証学者・谷森善臣(文化十四
年・一八一七)明治四十四年・一九一一)の見解によって、
明治二十二年(一八八九)、この吉田山東麓の墳墓は後一
条天皇陵にあたりと決定され、現在に至っているという。
吉田山山頂付近にある、小さくて目立たない現在の業平塚
は、森口氏によれば、これも以前から業平の塚と伝えられ
てきたということだが、本来は、今の後一条天皇陵が「在
原業平廟」として広く一般に知られていたのである。

『日本紀略』によれば、長元九年(一〇三六)に崩御し
た後一条天皇は、浄土寺西原で火葬され、遺骨はいったん
浄土寺に安置された後、火葬の地に建立された菩提樹院に
移された。同書によれば「山陵」等を置かないようにと遺
言もしていたという後一条天皇の陵墓が、吉田山の東斜面
に円墳の形で存在することについては異論も多いことと思
われる。ともかくも、それまでの伝承を無視する形で、い
ささか強引に、すべての天皇に「陵墓」が存在し、そして
現存もするという前提のもとに、明治期の陵墓比定はおこ

なわれた。それは何よりも、明治という時代の要請をうけておこなわれた、国策としての事業だったのである。

二

しかしながら、そもそも、なぜこの吉田山東麓、ないしは山頂の地に、在原業平の墓と称するものが伝承されてきたのだらうか。まず考えられるのは、京を捨て、隠棲の地を求めて「東山」に分け入った主人公が、そこで病を得て「死に入」ったことを語る、伊勢物語五十九段の次のような記述である。

昔、男、京をいかが思ひけん、「東山に住まむ」と思ひ入りて、

すみわびぬ今はかぎりと山里に身を隠すべきやど求めてむ

かくて、ものいたく病みて、死に入りたりければ、おもてに水そそぎなどして、生き出でて、

我がうへに露を置くなる天の川とわたる舟のかいのしづくか

となむ言ひて、生き出でたりける。

しかし、ここでは主人公は、いったん絶え入った後、再びよみがえり、「我がうへに」の歌を詠んでいる。主人公は東山で死んだと語られているわけではないのである。吉田山の業平塚が生み出された背景には、この上にさらに別種の事情が考えられねばならない。

三

森口氏の前掲記事には、今は後一条天皇陵とされている本来の「在原業平廟」の文献的根拠として、宝永三年（一七〇六）刊行の『本朝語園』や、蒲生君平の『山陵志』に引用されている『暁筆記』などが紹介されているが、『昭和京都名所図会』の脚注で竹村氏は、正徳元年（一七一二）に刊行された『山城名勝志』にもまた『暁筆記』が引用されていることを指摘しておられる。『暁筆記』とはすなわち、大永・享祿（一五二一～一五三三）ごろの成立かとされる雑録書『榻嶋暁筆』（市古貞次氏『中世の文学・榻嶋暁筆』解説・平成四年・三弥井書店）の別称である。その『榻嶋暁筆』には、業平の吉田の墓所について、以下のうな説明が記されている。森口氏が引用している『本朝語園』の記述も、実はこの『榻嶋暁筆』の記事をそのまま借用したものである。

（前略）しかるに彼中将、元慶四年五月九日に病を發し、同廿八日子剋に生年五十六歳、北面にして身まかり給へり。滋春遺詞にまかせ、東山吉田の奥にをくり納て廟を作る。（下略）

業平が遺言によって「東山吉田の奥」に葬られたという内容の記事は、他の文献には見られない。この『榻嶋暁筆』の記述に影響されて吉田山の古墳が業平塚とされるようになったのか、それとも逆に、当時すでに存在していた業平塚をふまえてこの記述がなされているのか、すべては不明

とせざるを得ないが、ともかくも吉田山の業平塚の本来の来歴は、古く室町時代以前にまでさかのぼるものだったのである。

さらに、ここで注意されるのは、その業平の墓が「廟」と呼ばれているという事実である。「墓」は死者を埋葬した場所を言うと考えてよいが、「廟」は、死者の霊をまつる「みたまや」の意で、故人を一種の信仰の対象として神格化し、礼拝するための施設である。息子の滋春が「遺詞」に従って「東山吉田の奥に」作ったのは、業平を神格化し、その霊を崇拝するための「在原業平廟」であつたと考えられる。

実は『榻嶋暁筆』には、さきに引用した記述に続けて、業平が死後に和泉国大鳥郡に出現し、その正体が住吉明神であることが知られたという話や、奇端を起こした業平の霊が天曆年間に勅命によって神としてまつられたという話などが載せられている。これらの話を伝承していた人々にとつて、業平はまさしく、「廟」にまつられるのにふさわしい神仏の化身であつた。

業平に対するそのような見方は、さらにさかのほれば、鎌倉時代から室町時代の中ごろまで広く用いられていた、伊勢物語の古注によつてもたらされたものであつたと考えられる。それら古注は大きく二種に分類されるが、そのうち『和歌知頭集』では業平は歌舞の菩薩・馬頭観音、もう一方の冷泉家流の古注では大日如来の化身などと説かれて

いる。現代の読み方とはまったく異なつた、いかにも中世という時代にふさわしい読解を通して、当時の人々は伊勢物語を、そしてその主人公である在原業平を捉えていたのである。今は後一条天皇陵に姿を変えた、かつての「在原業平廟」は、伊勢物語の主人公である業平を人々が神仏の化身として敬い続けてきた、その古い姿を今に伝える遺跡であつたと考えられる。

四

だが、このような事情だけでは、業平が「廟」にまつられた事實は説明できても、その「在原業平廟」がなぜこの吉田山東麓の地に設定されたかという間に答えることはできない。いったいなぜ、この地が業平の墓所選ばれねばならなかつたのだろうか。その答えはどこにも記されていないが、実は手がかりがないわけではない。それは、同じく吉田山の東麓の地に葬られた、陽成天皇の陵墓の存在である。

伊勢物語に、業平と二条后・藤原高子の恋愛がさまざまに語られていることはよく知られているが、さきにも見た冷泉家流の伊勢物語古注では、「陽成、業平の子なりければ」(九段注) などという注記がくり返し記されており、ここでは、高子が産んだ清和天皇の皇子、すなわち後の陽成天皇は、実は業平の子であつたと理解されている。これはもとより何の根拠もない荒唐無稽な把握ではあるのだ

が、伊勢物語を大きくふまえて作られたと考えられる源氏物語の光源氏と藤壺の物語では、周知のように藤壺は源氏の子を宿し、その子はやがて冷泉帝として即位する。これを逆に伊勢物語にあてはめれば、さきの冷泉家流古注の把握のように、陽成天皇は実は業平の子であったということになる。紫式部が伊勢物語をどのように読みとって、それを源氏物語にどう生かしたか、詳細はもとより知るべくもないが、さきのように考えれば、冷泉家流古注の見解も、あなたが荒唐無稽なだけの説とは言えなくなってくる。そのことの可否はともかくとしても、古注を通して伊勢物語を理解していた当時の人々に、陽成天皇が業平の子であることは、ほとんど自明のこととして受け入れられていたはずである。

その陽成天皇は、『日本紀略』によれば、天曆三年（九四九）九月二十九日に八十二歳で崩御、遺骸はまず円覚寺に移された後、十月三日に「神楽岡東地」に埋葬された。その埋葬の位置が現在の陽成天皇神楽岡東陵そのものであるかどうかは容易に確認しがたいが、ともかくもそのあたりに陽成天皇の陵墓が作られたことは、ほぼ間違いない事実であろう。陽成天皇の陵墓の位置が、中世の人々にどの程度意識されていたかは問題であるが、さきの『日本紀略』の記述などが広く知られていたとすれば、その陵墓の近くの場合に、天皇の父と考えられていた在原業平の廟が設定されたのも、ごく自然ななりゆきではなかったかと考えら

れる。

いま現地に赴いて、宮内庁によつて整備された後一条天皇陵、すなわちかつての在原業平廟と、東側の陽成天皇の陵を見ると、両者の間はわずか数メートル、吉田山山裾の斜面にあつて東面する業平廟の方がやや高い所にあり、そのほぼ正面に陽成天皇は眠っていることになる。両者の位置関係は、あたかも、光源氏ならぬ在原業平が我が子である陽成天皇の陵を、やや小高い所から静かに見守っているかのようにも見える。考えてみれば、天皇の母の二条后が晩年をすごした東光寺も、この地の南方ほど遠からぬ、現在の岡崎神社のあたりにあつた。吉田山の業平塚の背景には、伊勢物語がこれまでさまざまな形で人々に理解され続けてきた、そのひとつの姿が、今もかいま見られるように思われるのである。

（国文学者・関西大学教授）